

◇ 1月の天文暦 ◇

日 時	記 事
1 5	望
23	水星 西方最大離角
3 13	地球 近日点通過
6 15	小寒 (太陽黄経 285°)
8 23	下弦
9 13	月 最遠
16 20	朔
21 8	大寒 (太陽黄経 300°)
22 14	月 最近
23 18	上弦
20	天王星 留
30 20	望

萩原 雄 祐

“天文学者を語る”のシリーズの最後に登場する萩原雄祐先生は1897年生れというから、もうすぐ75歳になられるが、今でも毎日東京大学天文学教室におでましになり、大著 Celestial Mechanics の原稿作り、校正に余念がない。第一巻“Dynamical Principles and Transformation Theory”は今年の春、MIT Press から700頁の本となって出版されたが、この本は第五巻まで行かないと完結せず、私達ははたから見てみると、先生の元気さをもってすれば五巻で終わるのかどうかもあやぶまれる。

この第一巻だけは日本語の「天体力学の基礎 (I)」の上 (1947年)、下 (1950年) の英訳であるが、あとも先生の講義の原稿を最近の研究をとり入れてふくれあげさせたものである。私事にわたって恐縮であるが、この上巻は筆者の旧制高等学校3年の時に出版されたもので、この本に出会わなければ、筆者は天体力学を専攻することはなかったであろう。

萩原先生は Poincaré にひかれて天体力学に興味をもたれたときいているが、萩原先生がもし天文学者になっていなければ、よきにつけ、あしきにつけ、日本の天文



学界や東京天文台のふんいきは今とは全く違っていたものになっていたことは当然予想される。

1920年代のなかば、先生は全盛期のイギリスの Cambridge 大学に留学され、H.F. Baker や A.S. Eddington につかれて勉強された後、日本に帰国され、負負って理論天文学を学生に講義された姿は、今の我々にも想像がつく。それから20年以上たった我々の学生時代でも、先生は東京天文台長の激戦を務められるかたわら、週に3回の講義を受けもたれ、1回の講義が2時間のはずのところ、途中の小休止をはさんで3~4時間続いていたと記憶する。特別講義の題目も、「三体問題の位相数学」「稀薄天体の量子力学」「ラム関数論」など、ぼんくらな我等学生にも何と新鮮にうつったことか!

このような、勉学、研究一途と思われていた先生が、東京天文台長としてのあのような行政の手腕を示されるとは、我々の先輩も期待していなかったらしい。これは手腕というよりも、なにより天文学に対する情熱であったのだろう。

最近、先生は天文の集りにはほとんどでてこられないが、我々は、先生が天文の各種の研究会に出席され、批判の毒舌をはかれることを今でも期待しているのである。(古在由秀)

